

自己評価報告書(最終報告)

コース等名

芸術系コース(美術)

記載責任者

山木 朝彦

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 大学院の学生定員の充足

貴専攻・コースにおける過去5年間の大学院学生定員充足状況を分析・検証し、達成目標を設定するとともに、どのような具体的方策を立てて、目標達成に向けて取り組んでいくかを示して欲しい。

1. 目標・計画

目標・計画を立てる前に客観的なデータについて述べると、入学者数は、H14年度6人 H15年度18人 H16年度15人 H17年度18人 H18年度14人 H19年度22人 H20年度10人 H21年度11人 H22年度9人 H23年度11人である。10年間の平均の入学者数は13.4人、5年間の平均の入学者数は12.6人である。5年間という枠での充足状況についての分析をベースにということなので、この間の入学者平均は四捨五入で約13名ということになる。本学の教科・領域専攻の枠組みでは、音楽とともにこの定員数は他コースに比較してきわめて大きく、5年、もしくは10年の幅で見ると、その累計数ではきわめて貢献しているといえよう。そのうえで、下記の分析を述べたい。

本コース及び本コースに関わる教員数は平成12年度をピークに減少しつつある。また本コースの一つの柱である「工芸」を支える教員が欠員したままであり、教科教育の欠員も続いている。このように、大学院学生定員充足にはきわめて不利な状況が続いている。しかし各教員の血の滲む努力により充足こそしていないものの、大きく減少するまでにはいたっていない。これが偽らざる現状である。今後、社会情勢等、益々きびしい状況が予想されるが、定員充足(15名)するよう以下の対策をこころじる。

1. 美術コースのWebページを更新し、院生の修了展・論文発表はもとより、個展、グループ展、コンクール展や公募団体展の入選・入賞及び学会等での発表などの制作・研究活動を対外的に公表していく。
2. 附属における授業研究会の折や同窓会等を活用し、すでに修了した現職院生を介して、他の現職の受験の勧誘を行う。
3. 本コース教員が知り合いの大学教員宛に「大学院ガイドブック」「募集要項」等を送付、受験生の推薦を依頼する。また個展、グループ展及び学会参加等の機会があるごとに本コースの広報活動を行う。
4. 課題研究の中間発表に学部4年生も参加させ、進学への関心を喚起する。
5. 修了展(卒業展)や修了生のグループ展開催を支援し、修了生との交流を深め、本学への受験生の発掘につなげる

2. 点検・評価

1. 美術コースのWebページにおいて更新情報の提供に努め、院生の修了展・論文発表はもとより、個展、グループ展、コンクール展や公募団体展の入選・入賞及び学会等での発表などの制作・研究活動を対外的に公表していくことができた。
 2. 附属小学校を会場にして行われた「子どもの造形を考える会」などで教育現場の先生方に働きかけ、大学院の授業内容を伝えた。また、修了制作展会期中に徳島県立近代美術館に隣接する徳島県立21世紀館の講堂において現職の院生の修了論文発表会を行い、大学院の研究の実質を教員や市民に紹介した。
 3. 本コース教員が知り合いの大学教員宛に「大学院ガイドブック」「募集要項」等を送付、受験生の推薦を依頼する。また個展、グループ展及び学会参加等の機会があるごとに本コースの広報活動を行った。
 4. 課題研究の中間発表に学部4年生も参加させ、進学への関心を喚起した。
 5. 修了展(卒業展)や修了生のグループ展開催を支援し、修了生との交流を深め、本学への受験生の発掘につなげた。(上記は年度当初の記載に沿って記述している。)
- これらをふり返り、客観的に評価すると、目標に向けて誠実に行動したといえる。

I-2. 学生支援の取り組み

学生の卒業時・修了時における「質」保証のためには、常日頃から学生に対する支援を推進していくことが必要である。

貴専攻・コースにおけるこれまでの学生支援の取り組み状況を分析・把握し、本年度どのような学生支援の取り組みを行うか、具体的な方策を示して欲しい。

1. 目標・計画

1. 学校現場を念頭に置いた実践的な授業改善を積極的に推進するとともに、学生の基礎的知識の拡充を図る。
2. 卒業研究、修了研究の指導については、コースの全教員が指導する体制をとるとともに、自らの研究に関連のある領域に関しては、教員に対して積極的に質問等の交流を持つように学生に呼びかける。
3. 学生の進路・生活上の悩みなどの問題に関しては、クラス担任やゼミ教員が対応するだけでなく、問題によっては適宜コース会議で取り上げ、全教員による体制をとる。
4. 学生の自主的な運営による修了展・卒業展の開催を支援し、このことを通じてコース全体の融和と学生の目標意識を構築する。
5. 現代の学校教育における教材について、教員どうし、相互に情報を提供し合い、教育に活かす努力を行なう。

2. 点検・評価

1. 学校現場を念頭に置いた実践的な授業改善を積極的に推進するとともに、学生の基礎的知識の拡充を図った。
 2. 中間チェック等の機会を通じて、卒業研究、修了研究の指導については、コースの全教員が指導する体制をとることができた。研究に関連領域に関しては、指導教員に限らず、積極的に交流を持つように、学生に呼びかけることができた。
 3. 学生の進路・生活上の悩みなどの問題に関しては、クラス担任やゼミ教員が対応するだけでなく、問題によっては適宜コース会議で取り上げ、全教員による体制をとることができた。
 4. コース長が調整役を務め、学生の自主的な運営による修了展・卒業展の開催を支援し、このことを通じてコース全体の融和と学生の目標意識を構築することができた。
 5. FDの機会や附属校の研究会を通じて、現代の学校教育における教材について、教員どうし、相互に情報を提供し合い、教育に活かす努力を行った。
- (上記は年度当初の記載に沿って記述している。)
- すべての項目について、目標を完全に実施しており、とくに卒業・修了展覧会と修士論文発表会については、徳島県立近代美術館における実施のための予算的裏付けの見通しがつき、質の高い研究成果の公開を実施できた。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

1. 教育・研究面で活用できる資料を専修室と院生研究室に提供し、閲覧可能とする。
2. 予習・復習および研究が捗るよう、院生研究室の照明など環境面を改善する。
3. 学生どうし、院生どうしが相互啓発のため、自主的に連絡を取り合えるよう態勢づくりを促す。

2. 点検・評価

1. 教育・研究面で活用できる資料を専修室と院生研究室に提供し、閲覧可能とした。特に美術専門雑誌と教科書教材を充実させた。
 2. 予習・復習および研究が捗るよう、院生研究室の照明など環境面を改善した。
 3. 学生どうし、院生どうしが相互啓発のため、自主的に連絡を取り合えるよう態勢づくりを促した。
- 以上、計画はすべて実行した。

II-2. 研究

1. 目標・計画

1. 科学研究費補助金の申請等、積極的に外部資金の獲得をはかる。
2. 実技系教員の、公募団体展、コンクール展、グループ展、個展等での作品発表を推進する。
3. 学会等の学術団体における研究を推進する。

2. 点検・評価

1. 昨年度同様、科学研究費補助金の申請等、積極的に外部資金の獲得を図った。結果として継続的な科研2件と新規科研1件を受けることができた。
 2. 実技系教員の、公募団体展、コンクール展、グループ展、個展等での作品発表が進展した。
 3. 教科教育を中心に学会等の学術団体における研究発表が行われた。
- これらの点で、年度目標を忠実に履行することができた。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

1. 全員が、部会議、コース会議で積極的に発言し、大学運営に寄与する。
2. 各自が、委員として学内の各種会議に出席し、職務を遂行する。
3. メールを活用し、重要な事柄についてコース内での課題意識を共有する。

2. 点検・評価

1. 全員が、部会議、コース会議で積極的に発言し、大学運営に寄与した。客観的に見て、部会議、コース会議で美術教員の発言頻度は高く、その趣旨も建設的であった。
 2. 各自が、委員として学内の各種会議に出席し、職務を遂行した。
 3. メールを活用し、重要な事柄についてコース内での課題意識を共有した。特に、学生の学習の躓きが起きないように、情報と課題意識を共有できた。
- これらの点で、年度目標を忠実に履行することができた。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

1. 附属学校園で行われる授業研究会や実地教育にできるだけ参加して指導助言する。(附属学校)
2. 初等中等教科教育実践Ⅰ等(学部)、教育実践フィールド研究(大学院)の授業を通して、附属学校園との連携を深める。(附属学校)
3. 公開講座を開講し、地域との連携に貢献する。(社会連携)
4. 大塚国際美術館など地域の美術館との連携を図る。(社会連携)
5. 外国人留学生を積極的に受け入れ、全員の協力で指導にあたる。また、留学生を派遣する場合も快く支援する。(国際交流)

2. 点検・評価

1. 附属学校園で行われる授業研究会や実地教育には全員の教員が参加して指導助言した。(附属学校)
 2. 初等中等教科教育実践Ⅰ等(学部)、教育実践フィールド研究(大学院)の授業を通して、附属学校園との連携を深めることができた。特に後者では、実際に授業実施を果たし、有用な題材開発ができたこと、附属小学校教員から高く評価された。(附属学校)
 3. 公開講座を開講し、地域との連携に貢献した。(社会連携)
 4. 大塚国際美術館など地域の美術館との連携を図ることができた。(社会連携)
 5. 外国人留学生(研究生・院生)を計5名受け入れ、全員の協力で指導にあたった。また、留学生を派遣情報を学生に提供した。(国際交流)
- これらの点で、年度目標を忠実に履行できた。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

中間報告にも示したが、開学30周年記念行事にあたっては、ブロンズ像制作(長岡)や記念誌の表紙のデザイン(松島)、発行のための編集委員(山木)や各項目の執筆(野崎)など、複数の教員が全力で協力を行った。